

おじさん文学論に向けてードイツ語圏における研究史と 20 世紀初頭の児童文学を中心にー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sato, Fumihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054289

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



おじさん文学論に向けて

—ドイツ語圏における研究史と20世紀初頭の児童文学を中心に—

佐藤 文彦

はじめに

一般にドイツ語圏においては第一次世界大戦とその後の革命を経て、近代市民家族モデルは崩壊したといわれている。¹ つまり帝国の崩壊と父権の失墜は同時に並行して起こった現象と捉えられ、² 国家にとって国父（君主）が無用になったのと同様、子に対し父親は模範を示せなくなったと考えられるのである。その結果、両大戦間期ドイツ語圏の児童文学の世界では、無力な父親に代わり家庭と世間（世界）をつなぐ人物として、陽気なおじさんが活躍し始める。³

本論は、両大戦間期ドイツ語圏のおじさん児童文学について考察する前段として、20世紀初頭のドイツ児童文学におけるおじさん表象について検討するものである。そもそもなぜおじさんなのか。子、とくに息子にとっておじさんの存在価値は、父のそれと逆相関の関係にある。⁴ だとすると帝国が健在で父権の強い時代のおじさんは、子にとって影が薄いはずである。本論では、20世紀初頭のドイツ児童文学をもとに、この仮説の検証と精緻化を行う。その際に援用されるのは、歴史学や人類学における家族制度の変遷に関する研究成果および「父なき社会」化が進んだ世紀転換期の大人の文学に見られる父子関係の変化である。これらの考察を通じて、両大戦間期のドイツでおじさん児童文学が成立するに至るプロセスを解明することが、本論の目指すところである。

1. 大所帯家族と近代市民家族におけるおじさん

中世から近世初期の全き家あるいは大所帯家族から近代市民家族が成立・展開する過程については、すでに歴史学や民俗学の研究によって明らかにされている。⁵ まずは前近代に典型的な家族形態の特徴を見てみよう。

住民の大多数が手工業か農民だった前工業化社会において、家族＝家は経済機構の経営体とみなされ、消費共同社会であると同時に生産の単位であった。こうした家族＝家は「全き家」と呼ばれ、(中略) (1) 構成員は家父・家母・子・奉公人、(2) 家計と経営の一体化、(3) 家父長による他の成員の支配、(4) 前近代の政治世界の基礎単位、とい

う特徴をもっていた。⁶

その後、産業革命を経て仕事場と住まいが分離されると、男性世界と女性世界もまた分離される。外で働く父に対し、母の世界は三つの K、Kirche（教会）・Küche（台所）・Kinder（子ども）に限定されるようになる。もはや生産の場ではなくなった家族は縮小され、血縁関係にある少数の構成員（親子）の関係は情緒化されていった、というのがこれまでの研究の成果といえよう。

（前略）結婚は精神的、感情的に結ばれた共同体であり、家族は人を社会的文化的存在へと教育する場であるという発想は、この時代（引用者注：ビーダーマイヤー期）の所産である。この土壌のうえに、裕福な小家族という十九世紀的市民家族の主要なイメージが成長していった。つまり、社会的地位を決定するのは父親で、母親は家内を整え、二人は夫婦としての愛情（中略）で結ばれ、礼儀正しい、よく躰けられた子どもを育てるという関心を共有している、他方、子どもたちも職業や結婚相手を選ぶ時には親の願いに従う、そんな小家族である。⁷

父と母と子が親密な関係を築く近代市民家族におじさんの付け入る隙はないだろう。ではそれ以前の、近世の大所帯家族ならおじさんは活躍できたのかというと、これもまたそうではなかったといわざるを得ない。なぜなら前近代の家族において、家父長である父の権威は近代市民家族のそれよりも強かったはずで、おじさんの地位は相対的に低かったと考えられるからである。その証拠に歴史学や民俗学のドイツ家族史研究において、おじさんが言及されることはほとんどない。

おじさんの地位が高かった時代はもっと古くまで遡らなければならない。次章では人類学の成果に依拠しつつ、おじさんがとくに甥に影響力を発揮した時代について紹介する。

2. アヴァンキュレート

人類学の術語に「アヴァンキュレート」avunculate というのがある。

（前略）人類学では、「アヴァンキュレート」は母の兄弟と妹の息子との間に成立する特別な関係のすべてを指す言葉として使用される。もちろんこれには、母系社会では、妹の息子が母の兄の地位や称号や富や、また多くの場合その妻たちを継承する権利も含まれている。だが皮肉なことに、この問題が提起されたのは父系制社会での変形されたアヴァンキュレートに関してであった。⁸

上述の通り母の兄弟と姉妹の息子、すなわちおじさんと甥の特別な関係は、母系社会だけでなく父系社会にも存在する。概して先行研究は父系社会のアヴァンキュレートのようにより焦点を当てているようだ。

（前略）母系社会でも、母の兄弟は、姉妹の息子の面倒を見るが、これは母親のリネージ（血統）の内部に属している。しかし父系社会では母の兄弟は、外部にいたので、甥と母方のオジの関係は内部と外部をつなぐ絆として注目されるのである。⁹

父系社会における母の兄弟と姉妹の息子の関係を考える上で、中世ヨーロッパの叙事詩に登場するおじと甥の存在を見過ごすことはできない。先行研究では、『ロランの歌』のシヤルルマーニュとロラン、アーサー王物語のアーサー王とガウェイン、『トリスタンとイゾルデ』のマルケ王とトリスタン、『パルツィヴァール』の聖杯王アルフォンタスとパルツィヴァールが挙げられている。¹⁰

さりとて父系社会というのは、息子が父の血統を継承するものである。そこでは当然、母の兄弟、すなわちおじさんの地位は低下する。その結果、文学のモチーフとしても、おじと甥の関係より、父と息子の関係、あるいはその変種としての「父殺し」のほうが重視されるようになったのではないか。本論では、父子関係を描く文学の変遷について触れる余裕はないが、先に言及した近世の大所帯家族から近代市民家族という家父の力が強い時代とは、中世文学がアヴァンキュレートを好んで描いたのとは異なり、むしろ父子の相克をモチーフにした文学が盛んだった時代と一致するものと考えられる。

3. 父なき社会の息子の文学

シラー『ドン・カルロス』*Don Karlos* (1787) や『たくらみと恋』*Kabale und Liebe* (1784) を例に、父子の相克こそが（近代）文学の原生岩石（Urgestein）であり、父に反逆する息子に旧来の権威の破壊者、新時代を見ようとするハンス・リヒャルト・ブリットナーは、19 世紀末から 20 世紀初頭のドイツ文学における父子関係の変化を次のように指摘している。

19 世紀までの文学では、父は息子を手なずけて支配するか、徹底的に苦しめる存在だった。息子はそんな父を乗り越えるか、錯乱しながら復讐を果たした。父子の相克をめぐるこういった理想的かつ典型的な関係は、先の世紀転換期の文学で消滅する。もはや息子を支配する残酷な父はいなくなるものの、息子は暴君としての父にではなく、父の関与のなさ、あるいは父の不在に苦しみ続けるのである。¹¹

父なき息子であることの矛盾について物語る世紀末文学の代表者として、ブリットナッハーはホフマンスタール (1874-1929)、リルケ (1875-1926)、シュニッツラー (1862-1931)、シュテファン・ゲオルゲ (1868-1933) らの名前を挙げている。例えばホフマンスタールのエッセイ「ガブリエーレ・ダヌンツィオ」*Gabriele D'Annunzio* (1893) は以下のように始まる。

初期のオッフェンバッハと同時代人だったわれわれの父親たちと、レオパルディと同時代人だったわれわれの祖父たち、そして彼らよりもっと前の世代の、数え切れないほどの人たちすべては、われわれ、つまりあとに生まれた者たちに対し、たったふたつのものしか残してくれなかったように感じることもある。それはいい家具と繊細すぎる神経である。(中略) われわれに残されているのは、凍えるような生活、味気ない、荒れ果てた現実、活力をなくした諦念だけである。¹²

「父なき世界」と名付けられたこの論文の中でブリットナッハーは、ホフマンスタールやリルケの作品を例に、世紀転換期に生きた息子世代の社会化、父親探しはいつも失敗に終わる、そして彼らの自己犠牲、つまり死でもって幕を閉じると述べている。¹³

「父なき世界」あるいは「父なき社会」という概念を最初に提唱したのはウィーン出身の精神分析学者ポール・フェダーン (Paul Federn, 1871-1950) である。1919年に発表された『革命の心理学：父なき社会』*Zur Psychologie der Revolution: Die vaterlose Gesellschaft* においてフェダーンは、第一次世界大戦末期にオーストリア＝ハンガリー二重君主国が崩壊し、オーストリア共和国が成立するまでの「国父の喪失に伴う国民の集団的混乱」¹⁴ を社会心理学的に論じた。

その後、この概念はフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) を経て、戦後ドイツの精神分析学者アレクサンダー・ミッチャーリヒ (Alexander Mitscherlich, 1908-1982) に引き継がれる。代表作『父親なき社会』*Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft* (1968) においてミッチャーリヒは、父への同一化が困難な世代は「成長して支配者なきおとなになり、無名の機能を営み、無形の機能から支配される」¹⁵ とし、父なき社会の出現を「高度に工業化された現代社会に対する批判的文明論」¹⁶ という文脈の中に位置付けた。

(前略) 彼 (引用者注：ミッチャーリヒ) によれば、農業や手工業が主な労働形態だった時代には、父親像が権威構造を基礎づけていた。ところが、産業化が進むにつれて住居と職場とが分離し、子どもの視野から父親の働く姿が消えることになった。この父親喪失が、父親的なものと結合していた権力を無名の組織体へと変容させ、さらにはこの変化が子どもの成熟困難につながっているのである。¹⁷

ミッチャーリヒが指摘した父なき社会化は 19 世紀を通じて進行し、この現象は世紀転換期のドイツ文学、青年が主人公の大人の文学の世界では、父という成長モデルを失った青年の自己喪失、破滅に行き着いた。ブリットナッハーのこの主張を踏まえ、論者は以下の問いを立ててみた。青年よりもっと若い息子世代、世紀転換期のドイツ児童文学に描かれた少年たちにとって、父親とはどういった存在だったのか、あるいは父に代わりおじさんが成長モデルになることはなかったのか。本論冒頭で述べた通り、両大戦間期ドイツ児童文学におけるおじさんの活躍はすでに認められている。ではもう 20 年早い時代のおじさんはどうだったのか。この問いを念頭に以下、ふたつの文学作品の分析に取り組む。

4. ザッパー『プェフリング家』(1907)：母の兄弟の敗北

アグネス・ザッパー (Agnes Sapper, 1852-1929) 『プェフリング家』*Die Familie Pfäffling* (1907) の構成員は 10 人、音楽学校教師の父と専業主婦の妻、四男三女からなる 7 人の子どもたち、そしてお手伝い (Dienstmädchen) である。20 世紀初頭の南ドイツに暮らすこの一家の物語をザッパーは 3 つの作品に書いているが、¹⁸ この小説で描かれるのはある年の冬学期の始業から翌年のイースター休暇までである。

この家族の最大の特徴は、19 世紀型市民家族の生き残りといって過言でないほどの父親を中心にした結束の強さ・親密さである。その様子は以下のクリスマス直前の描写に表れている。

(前略) よその家には雪とつららでもっと美しく飾られたモミの木もあります。(中略) プェフリング家のクリスマスツリーはそうではありませんでした。30 年前にプェフリングのおじさんやヴェーデキント (引用者注：母の旧姓) のおばあさんが飾ってくれたものとほとんど同じでした。クリスマスツリーは子どもの頃の幸せな思い出と結びついているので、お父さんもお母さんもそれを変える気などなかったからです。¹⁹

ドイツの家庭でクリスマスツリーに蠟燭を灯す習慣が広まったのは 19 世紀のことである。自らを聖家族になぞらえ、理想的家族像を自画自賛するためにこの習慣が広まったというヴェーバー＝ケラーマンの指摘は、的を射ている。²⁰ そんなクリスマスのお祝いに母親はどういった役割を果たすべきか、プェフリング夫人は労働者の妻を次のように諭す。

「(前略) もっとたくさん物があっても、それだけでは素敵なお祝いにならないの。それができるのはあなただけ。家族のためにしてやれるのはあなただけなの。よその人がクリスマスの喜びを家の中まで運んでくることはできません。それができるのはお母さんだけなんです。(後略)」²¹

母が家庭を守る一方、市民家族の父親がもっとも考慮すべき事柄は息子の教育だった。以下の引用でもまた、プェフリング家の家族経営が他の階級のそれとの比較によって賞揚されている。

（前略）ロシアの将軍も、金持ちの実業家も、そしてつつましい音楽教師も、けっきょくはみんな同じことを心配していました。お金や土地だけでは満足できない。誰もが自分の子どものことを気にかけていました。誰もがみんな立派な息子を望んでいました。そして貧しい音楽教師は、お金持ちと同じか彼らよりもたやすく、そんな息子を持つことができました。²²

一方では労働者階級を配置し、もう一步では所有市民層とプェフリング一家を対比することで、教養市民層がもっとも優れている、家族経営の面で一番うまくいっていることを強調する描写は、中流の市民階級の自尊心をくすぐると同時に、彼らの矜持を見て取ることができよう。

これだけ結束の固い家族におじさんの出番などないのではないか、と思いきや、最終章でプェフリング夫人の兄が現れる。北ドイツの大学教授であるおじさんは、ある目的を持って妹一家を訪問する。

おじさんは3日間プェフリング家に滞在し、甥や姪をじっくり観察しました。おじさんはみんなが楽しめるゲームを持ってきていました。（中略）子どもたちはそのゲームに夢中になると毎日遊びました。おじさんが新聞の陰に隠れてその様子を見ていることなど、誰も気に留めませんでした。²³

おじさんは何のために甥や姪をこっそり観察しているのか。それは子だくさんで家計が苦しいプェフリング一家を助けるべく、甥か姪の誰かひとりを預かって1年間育てることを提案し、夫妻の了承を得たのち、子どもたちを選別していたのだった。その結果、おじさんは以下の結論にたどり着く。

「法律の専門家である私には、お前たちの小さな国は実に興味深い。こういった家庭から立派な国民が生まれるということがよくわかったよ。強い者は弱い者の面倒を見ているし、誰もが自分のことよりもみんなのことを優先している。子どもたちは国家元首である両親を愛し、敬っている。そうしないとすべてがうまくいかないとわかってるんだろうな。おまけにお前の夫は気さくな君主だし、お前は責任感の強い大臣だ。仮に私がお前たちの子どもをひとり預かったとしても、これほどきちんとした国家に入れるこ

とはできないよ」²⁴

こうしておじさんの試みは失敗に終わる。かつてのアヴァンキュレートよろしく、父に代わって姉妹の息子に影響力を行使することができなかったおじさんは、続いてさらに奇妙な提案を行う。

「(前略) 計画を逆にしてはどうだろう。うちの息子を送り込むから、ここで預かってくれないか。(後略)」

そうすることに決まりました。²⁵

おじさんの息子にとってプエフリング夫人は父の姉妹に当たる。息子の面倒を父が見るのでもなく、かといって母の兄弟が引き受けるのでもなく、父の姉妹の一家に託そうとするおじさんの発想は、人類学の家族制度の研究にも例を見ないものではないか。斬新といえば斬新な、奇抜といえば奇抜なこの提案がその後、本当に実現したのかどうか、この小説では触れられていない。しかしおじさんが退場する直前に発する、次のひと言を見逃すことはできない。「おじさんは誰を連れて行くつもりだったの？」という幼い姪からの質問に、おじさんは以下のように答えるのである。

「そんなに知りたいかい、小さな知りたがり屋さん？あの子にしようかな」おじさんはそう言うと、フリーダーを指さしました。フリーダーはうなずいて、そうだろうな、という気持ちを示しました。²⁶

おじさんが名指したフリーダーとは、7人兄弟姉妹の6番目、もっとも音楽の才能に秀でた少年である。彼だけが音楽教師の父からヴァイオリンを与えられ、英才教育を受けている。おじさんが父の後継者たるこの少年を指名したことの意味は大きい。おじさんは妹の息子、つまり甥たちのなかでフリーダーをもっとも欲したもの、彼を父親から奪えなかった。この事実は家父の力が強い19世紀型市民家族の完全勝利、あるいは母方のおじさんの完膚なきまでの敗北を意味する。

『プエフリング家』のおじさん描写を通じて、父権の強い近代家族に母方のおじさんが付け入る隙はないということ、次世代の男子が継承するのはおじさんでなく、父の価値なり世界であるということ、そして父と母方のおじは共存し得ないということが再確認された。少なくともこの作品を読む限り、アグネス・ザッパの文学世界に父なき社会はいまだ到来していない。したがって『プエフリング家』は父権の強い社会、おじさんなき社会で展開される家族の物語であるということができよう。

5. トーマ『悪童物語』(1905/1907)：代理父としての他人のおじさん

ルートヴィヒ・トーマ (Ludwig Thoma, 1867-1921) 『悪童物語』 *Lausbubengeschichten* の主人公、ルートヴィヒ少年に父はいない。この点で本作は『プエフリング家』と決定的に異なる。父亡き後、母と姉のもとで育ったルートヴィヒは、ギムナジウムに通いながらいたずらに明け暮れる日々を送っている。そんな少年の日常のエピソードをつづった一話完結の短編小説が、ミュンヘンの週刊誌『ジンプリツィスムス』 *Simplicissimus* 連載を経て、書籍として出版されたのは 1905 年のことだった。1907 年には続編も刊行されている。全部で 18 編ある物語に登場するおじさんは延べ 7 人。ペピーおじさんが 3 人、フランツおじさんが 2 人、そしてもう 2 人のハンスおじさんである。同名のおじさんをひとりにまとめられれば問題ないのだが、この作品に登場する 7 人のおじさんはみな別人格のように描かれている。以下、彼らが初登場する場面を列挙する。

(前略) ペピーおじさんはとても信心深い。裁判所の書記をやっているのだけど、本当は神父になりたかったとよく言っている。ただお金がなかったから大学を中退したらしい。

一度、おじさんと (ファニー) おばさんと大喧嘩した時、あんたはギムナジウムにも行けないくらい大馬鹿者だったくせに、とおばさんは言っていた。²⁷

母さんのところに退役少佐のフランツおじさんから手紙が届いた。おじさんは僕を立派な人間にしてみせると書いていたので、母さんはとてもうれしいよ、と言った。²⁸

(前略) フランツおじさんは親戚一の金持ちだ。印刷屋をやっていて、カトリックの新聞を出しているくらいだからとても信心深い。おじさんのところに行くとき聖人画をくれる。だけど小遣いや食べ物はずくれぬ。ラテン語ができる人みたいにいつも振る舞っているけれど、ただのドイツの学校卒だ。²⁹

ハンスおじさんがアンナおばさんとやって来たのは、僕には一番うれしかった。おじさんは林務官だ。休暇の時におじさんのところに行ったことがある。おもしろい人で、僕がフリーダおばさんの物まねをするといつも笑って、ヤマネコみたいにいやな奴め、と言っていた。³⁰

今度は母さんが税務官のペピーおじさんとやって来た。³¹

彼女はハンスおじさんの娘だ。おじさんはいまボンベイにいる。ぜんぜん勉強しなかったから、ドイツから追い出されたい。けどいまは大金持ちで、大農園でお茶を作っている。³²

午後になってテーレスおばさんが娘のローザとやって来た。ペピーおじさんもエーリスおばさんとやって来た。³³

それぞれのおじさんの職業またはパートナーの名前がすべて違うことから、彼らはみな別人であると判断される。上から順に、最初のペピーは裁判所書記、次のフランツは退役少佐、その次のフランツは印刷屋なので、これらふたりのフランツは別人である。四番目のハンスは林務官、五番目のペピーは税務官であることから、後者は冒頭の、裁判所書記のペピーとは別人である。次にまたハンスが登場するが、彼は林務官でなくインド・ボンベイの農場経営者である。最後のペピーにはエーリスという名の妻がおり、この名は冒頭の、裁判所書記のペピーの妻（ファニー）とは別人であることから、これらふたりのペピーも別人と考えられる。また、税務官のペピーは姪の結婚式に単身で参列していることから、独身であると推測される。

ところで論者はこれら7人のおじさんの登場を、各エピソードの主人公の年齢（学年）順に並べ替えて配置した。³⁴ しかし一般に流通している単行本の配列は雑誌発表順になっており、主人公の年齢（学年）が前後している。この事実から、作者トーマは主人公以外の副人物の造形にはさほど関心を抱いていなかったと考えられる。その証拠に彼らおじさんたちは、ルートヴィヒの母の兄弟なのか、それとも亡き父の兄弟なのかも判然とせず、姻族である可能性も疑われる。こういったぞんざいなおじさんの扱い、いい加減な描写によって、この作品に登場するおじさんたちは総じて影が薄い。それはちょうど、母方のおじと対極な関係にある人物、すなわち父の姉妹に当たるフリーダおばさんが一貫してネガティブな人物として描かれているのとは対照的である。³⁵

もう一度7人のおじさんに注目してみよう。彼らの中で唯一ポジティブに描写されるのは林務官のハンスおじさんだけである。この職業の意味するところは小さくない。なぜならルートヴィヒの亡き父もまた林務官だったからである。このことから、ルートヴィヒがハンスおじさんに亡き父の面影を求めていることが読み取れる。しかしハンスおじさんがルートヴィヒの父代わりを務めることはない。むしろ『悪童物語』においてルートヴィヒの代理父になろうとする人物は、親戚ではない他人のおじさん、最終章に登場するゼンメルマイアーという人物である。

元将校のゼンメルマイアー大尉と元家庭教師のゼンメルマイアー夫人ができの悪い子を正しい道に導き、優秀な生徒に変身させるということが新聞に載っていた。³⁶

そしてルートヴィヒと母親はゼンメルマイアー夫妻と面会する。その席でゼンメルマイアーは次のように述べ、ルートヴィヒを引き受ける。

（前略）その男（引用者注：ゼンメルマイアー）はまぶたを閉じ、この子を私の息子とみなすつもりです、と言った。³⁷

ルートヴィヒと血のつながっていない男、他人のおじさんが父の役目を引き受けると宣言するこの発言は、親戚のおじさんの以下の発言と対比することができるだろう。

ゼンメルマイアーを訪れる以前、ルートヴィヒは退役少佐のフランツおじさんのもとに下宿していた。このおじさんも甥を「立派な人間」に教育し直そうと試みるが、けっきょくはうまく行かなかった。

（前略）だけどフランツおじさんは僕にとっても厳しく、僕を見つけたらいつもこう言っていた。「おい、待て、クソガキ、いつかとっちめてやるぞ」³⁸

ルートヴィヒはこんなおじさんを「なんて卑しい人間なんだ」と思う。そして彼のもとを飛び出す。そういった伏線があったのち、はたしてルートヴィヒはよそのおじさんのもとで成長を遂げられるのかということ、やはりそうはいかない。なぜならゼンメルマイアーの教育とは、軍人の養成を念頭に置いたもの、彼の言葉を借りれば「スパルタ人」を理想とするものだったからである。

ゼンメルマイアーは、米には栄養があるのだ、アジアではみんな米を食べて生きているのだ、肉を食べている国民は、米ばかり喰っている国民ほど、よい兵隊にはなれないのだ、と言った。そして自分は焼肉とじゃがいもサラダを食べていた。³⁹

毎週木曜日は麦粥しか出なかった。ゼンメルマイアーは、君たちがスパルタ人かどうか試しているのだ、と言った。⁴⁰

父親のいない少年が、親戚のおじさんのもとでも、よそのおじさんのもとでも社会化できない時、その少年に残された道は破滅とまではいわないにせよ、成長しないことしかないのかもしれない。もっともこの小説は、ルートヴィヒの悪童ぶりを描くことに専念した一種の悪漢小説なので、必ずしも彼が父親世代の成人男子をモデルに大人になる必要はない。

ところで本論の目的は、両大戦間期ドイツでおじさん児童文学が成立するに至る、その

プロセスを追うことだった。その関連でこの作品にゼンメルマイアーとはまた違うタイプのよそのおじさん、親戚ではない他人のおじさんが登場しているのは注目に値する。ゼンメルマイアー夫妻のもとに下宿する前日、ルートヴィヒは母といっしょにハイスという男性を訪問している。

（前略）午後に母さんは上級林務官のハイスさんを訪問した。ハイスさんはずっと町はずれに住んでいた。家には大きな庭があり、それは僕のお家と同じくらい素敵だった。ダックスフントが吠えていた。玄関でもうたばこの匂いがした。部屋には鹿の角がいっぱいかかっていた。ハイスさんは僕たちが来たことを喜んだ。奥さんがコーヒーとケーキを持ってきてくれた。ふたりは母さんと、僕の父さんがまだ生きていた頃の話をした。父さんはハイスさんの一番の友達で、いつもいっしょだった。ハイスさんはパイプで僕を指しながら、君はキツネの穴で生まれたんだから、森で暮らさなきゃいかん、その気はあるかい、と聞いた。僕は、本当は一番そうしたいんです、と答えた。でも母さんはまたため息をついて、この子は勉強が好きじゃないんです、と言った。⁴¹

作中、ルートヴィヒとハイスが交流するのはこの場面だけである。しかしハイスもまた、ルートヴィヒが慕う唯一のおじさん（ハンスおじさん）や父と同じ林務官であること、加えて彼と父は親友だったというさりげない描写から、ハイスはルートヴィヒの代理父になり得る可能性を備えた人物であると見なすことができる。しかしこの時点ですでにルートヴィヒは、翌日からゼンメルマイアーのもとで暮らすことが決まっている。したがってハイスが彼の父代わりになることはない。

そんなハイスとゼンメルマイアーは実は接点がある。ルートヴィヒらとの対話の中で、ハイスはヨーゼフ・ゼンメルマイアーという古い知り合いを思い出す。このゼンメルマイアーは、戦争で撃ち合いになるといつも隠れる愚かな少尉で、「角笛ペピー」と呼ばれていたという。そしてこの人物がルートヴィヒの新しい先生でなければいいのだが、との懸念を口にする。しかしその声はルートヴィヒの母に届かない。

（前略）帰り道に母さんは僕に、ゼンメルマイアーさんが角笛ペピーだなんて思っではいけません、ハイスさんは父さんの友だちだから好きだけど、あの人は猟師で、猟師は子どもにふさわしくない冗談をよく言うんだから、と言った。⁴²

はたしてルートヴィヒが下宿する先のゼンメルマイアーのファーストネームがヨーゼフかどうか、作中明確には述べられていない。

しかしこの小説の最終章で、ふたりの他人のおじさんがほぼ同時に登場し、少年に慕われ、ポジティブな影響を及ぼすことが期待されるおじさんは深く書き込まれず、むしろそ

うでないタイプのおじさん、軍人養成教育を旨とするゼンメルマイアーのほうが本作の副人物としては異例なまでにしっかりと造形されている点は、いやがうえにも目を引く。なぜルートヴィヒは父や肉親のおじさんに近いハイスではなく、ゼンメルマイアーのもとに送り込まれるのか。その後のおじさん児童文学への接続を考える上で、この問いはぜひとも解決したい。論者の読みではその手がかりはこの小説の最後の一文、ゼンメルマイアーの部屋に花火を放り込むいたずらを思い付いたルートヴィヒの以下のひと言に込められている。

僕にロケット花火を点けさせてくれよ、とマックスに頼んだ。僕にはそれが待ち遠しくてならない。⁴³

この小説でルートヴィヒのいたずらの犠牲になる大人は、教師や亡き父の姉妹など、枚挙に暇がない。もちろんそこにハンスおじさんやハイスは含まれていない。ルートヴィヒは当然、ゼンメルマイアーに対してもいたずらを仕掛けるに値する反感を抱く。しかし結果的に彼へのいたずらは実行されず、夢想するだけで小説全体が終わっている。論者はここにハンスおじさんやハイスが活躍できない要因を見て取った。彼らのように少年に慕われるおじさん、父代わりになり得る陽気なおじさんがもっと前面に出て、少年の成長に影響力を行行使するには、ゼンメルマイアーのような人物がいったんいなくなる必要がある。ルートヴィヒが最後に発した「僕にはそれが待ち遠しくてならない」*ich kann es nicht mehr erwarten* の目的語 *es* とは、単にロケット花火を投げ入れる瞬間を意味するのではなく、来るべき第一次世界大戦に敗れることで、旧来の強い父親像が失墜することまで含んでいるのではないか。いまはまだゼンメルマイアーに代表される厳しい、場合によっては好戦的な父親タイプが威張っているけれど、いずれ彼らが滅びるのを「待ち遠しくてならない」と、世紀転換期の少年は期待あるいは予言していたのではないか。大人の文学に描かれた青年が父なき社会の到来に戸惑っていたのと同じ頃、児童文学の少年は自らは父殺しに手を染めることなく、父なき社会の到来を待ちわびていたのではないか、というのが論者の仮説である。

おわりに

本論冒頭で述べた通り、市民家族が永遠に続くという幻想は第一次世界大戦とその後の革命によって崩壊した。もはや父は子の社会化のための唯一絶対の理想像ではなくなった結果、多様な父親像が生み出された。そういった流れのひとつとして、父に代わって息子の成長に影響を及ぼす成年男子、すなわちおじさんが登場する。ただしその際、おじさんは前近代的な母の兄弟、アヴァンキュレートのおじさんに限定されるべきものなのか、そ

れとも『悪童物語』のハイスのように、血のつながっていないおじさんにまで拡大解釈してよいものなのか。この問題について人類学者のロビン・フォックスは、現代におけるおじさんの復権を「母方のオジさん」に限定している。

（前略）配偶者がますます当てにならなくなり、「国家というオジさん」——福祉を通じた国家（アングル・サム）という代理親——もますます人気なくなっている。そのようなとき、兄弟と姉妹という絆が疑似両親の選択肢として魅力的になることはありえよう。（中略）結婚が壊れやすく、唯一の選択にならず、むしろ無価値となった社会では、（中略）兄弟－姉妹の絆の確かさがもともと集合的な親族の図式の中で魅力ある代替案となることは充分にありうるだろう。（中略）国家というオジさんが没落するとき、母方のオジさんが出番を待っている。⁴⁴

他方、ドイツ児童文学者のビルテ・トストは血縁関係に縛られないおじさんを想定している。

（前略）「おじさん」は必ずしも本当の「おじさん」、つまり主人公の母または父の兄弟とは限らない。ワイマール共和国時代末期の児童文学では、第三者的立場にいる親切な大人の協力者としてもまた、おじさんは導入された。こういったおじさんが投入されることによって、父親を描くことを回避したり、父親不在の状況を埋め合わせる児童文学が登場したのである。⁴⁵

論者の立場はトスト同様、20世紀ドイツ児童文学で活躍するおじさんはもはや血縁に限られないというものである。具体的には『悪童物語』の最後に登場したふたりの代理父、父の厳しさが前面に押し出されたゼンメルマイヤーと、そうでないタイプのおじさん、公的規範からの逸脱を許すハイスさんのようなおじさんの優劣が入れ替わるのが第一次世界大戦であると考えている。

現代におけるおじさん概念の拡大ということに関し、海野弘は次のように述べている。

親は子に責任があり、また直接の利害関係もある。しかしおじ・おばは甥・姪に特に責任はない。その代りに見返りも期待できない。だがそれにもかかわらず、おじさん・おばさんは子どもたちに惜しげもなく愛を注ぎ、知識や財産を贈り、彼らが大人になるとひっそりと去っていき、忘れられる。

そのことが、おじさん・おばさんの切なさであり、すばらしさなのだ。

だが、そのような人たちは消えつつある。少子化の中で、おじ・おばがいなくなっている。子どもたちは親だけで世話できるのだろうか。おじ・おばの減少をどうしたいい

のだろうか。もう血縁や親族としてのおじさん・おばさんだけでは足りなくなっている。

(中略) おじさん・おばさんはかなり広い意味を持っている。私たちは、近所の、そのへんの、<おじさん>や<おばさん>を含めて考え直してみてもいいのではないだろうか。⁴⁶

おじさんなる存在をもっと広く捉え直した上で、両大戦間期ドイツ児童文学におけるおじさん表象について考察することは、論者の今後の課題としたい。

<注>

- ¹ I・ヴェーバー＝ケラーマン『ドイツの家族 古代ゲルマンから現代』鳥光美緒子訳、勁草書房、1991年、185頁参照。
- ² Vgl. Birte Tost: *Moderne und Modernisierung in der Kinder- und Jugendliteratur der Weimarer Republik*. Frankfurt am Main: Lang 2005, S. 187.
- ³ Vgl. Tost: a.a.O., S. 194.
- ⁴ クロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』荒川幾男他訳、みすず書房、1972年、51-52頁参照。
- ⁵ 手近なところとしては、ヴェーバー＝ケラーマン（前掲書）およびリヒャルト・ファン・デュルメン『近世の文化と日常生活 1 「家」とその住人』佐藤正樹訳、鳥影社、1993年が有益であった。
- ⁶ 姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』山川出版社、2008年、18頁。
- ⁷ ヴェーバー＝ケラーマン（前掲書）、113頁。
- ⁸ ロビン・フォックス『生殖と世代継承』平野秀秋訳、法政大学出版局、2000年、287頁。
- ⁹ 海野弘『おじさん・おばさん論』幻戯書房、2011年、38頁。
- ¹⁰ ロバート・ブレイン『友人たち／恋人たち 友愛の比較人類学』木村洋二訳、みすず書房、1983年、7頁およびフォックス（前掲書）、305頁参照。さらにフォックスは「アイルランドのサガ」に見られるアヴァンキュレートについて言及している。フォックス（前掲書）、305頁参照。
- ¹¹ Hans Richard Brittnacher: Welt ohne Väter: Söhne um 1900. Von der Revolte zum Opfer. In: *Kursbuch*. 140 (2000), S. 53-65, hier S. 55
- ¹² Hugo von Hofmannsthal: Gabriele d'Annunzio (I). In: Hugo von Hofmannsthal: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Prosa I*. Hrsg. v. Herbert Steiner. Frankfurt am Main: Fischer 1956, S. 147-158, hier S. 147f.. 訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。フーゴー・フォン・ホーフマンスタール「ガブリエレ・ダヌンチオ」松本道介訳、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール『フ

ーゴ・フォン・ホーフマンスタール選集 3 論文 | エッセイ』富士川英郎他訳、河出書房新社、1972 年、358-367 頁。該当箇所は 358 頁。

¹³ Vgl. Brittnacher: a.a.O., S. 56ff.

¹⁴ 白波瀬丈一郎「父なき社会」、加藤敏他（編）『現代精神医学事典』弘文堂、2011 年、697 頁。

¹⁵ アレクサンダー・ミッチャーリヒ『父親なき社会 社会心理学的思考』小見山実訳、新泉社、1972 年、294-295 頁。

¹⁶ 白波瀬（前掲書）、同上。

¹⁷ 白波瀬（前掲書）、同上。

¹⁸ Vgl. Agnes Sapper: *Das kleine Dummerle* (1904) u. A.S.: *Werden und Wachsen. Erlebnisse der großen Pfäfflingskinder* (1910).

¹⁹ Agnes Sapper: *Die Familie Pfäffling*. Altenmünster: Jazzybee-Verlag 2016, S. 74. 訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。アグネス・ザッパ『愛の一家 あるドイツの冬物語』遠山明子訳、福音館書店、2012 年。なお、これ以降の同作品からの引用に際しては、注に作家名とページ数のみ記す。

²⁰ ヴェーバー＝ケラーマン（前掲書）、238-259 頁、とくに 241 頁参照。Vgl. auch Sebastian Schmidler: *Bilder aus dem Familienleben. Familiendarstellungen in der Kinder- und Jugend-literatur im Prozess der Modernisierung (18. bis 20. Jahrhundert)*. In: *kjl&m*. 17.extra (2017), S. 55-69, vor allem S. 64.

²¹ Sapper, S. 72f.

²² Sapper, S. 91.

²³ Sapper, S. 144.

²⁴ Sapper, S. 145.

²⁵ Sapper, S. 146.

²⁶ Sapper, S. 146.

²⁷ Ludwig Thoma: *Lausbubengeschichten. Tante Frieda*. Frankfurt am Main: Fischer 2012, S. 60. 訳出に際しては以下の翻訳を参考にした。トーマ『悪童物語』浦山光之訳、旺文社、1976 年。なお、これ以降の同作品からの引用に際しては、注に作家名とページ数のみ記す。

²⁸ Thoma, S. 25.

²⁹ Thoma, S. 49.

³⁰ Thoma, S. 49.

³¹ Thoma, S. 49.

³² Thoma, S. 99.

³³ Thoma, S. 102.

³⁴ 浦山訳の解説およびあとがき参照。

³⁵ 母の兄弟と父の姉妹が反対の極である点については、フォックス（前掲書）、335 頁参照。

³⁶ Thoma, S. 150.

³⁷ Thoma, S. 151f.

³⁸ Thoma, S. 25.

³⁹ Thoma, S. 156.

⁴⁰ Thoma, S. 158.

⁴¹ Thoma, S. 153f.

⁴² Thoma, S. 154f.

⁴³ Thoma, S. 164.

⁴⁴ フォックス（前掲書）、339 頁。

⁴⁵ Tost: a.a.O., S. 193. トストと同じ児童文学者でも、マッテンクロットはドイツ児童文学に登場するおじさんは「つねに母の兄弟」であると述べている。Vgl. Gundel Mattenklott: *Kleiner Exkurs über den Onkel in der Kinderliteratur*. In: G.M.: *Zauberkreide. Kinderliteratur seit 1945*. Stuttgart: Metzler 1989, S. 108-110, hier S. 108.

⁴⁶ 海野（前掲書）、282-283 頁。

本研究は JSPS 科研費 18K00446 の助成を受けたものである。